

2018年2月4日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記7章1～12節

説教：ソロモンの宮殿

はじめに

ソロモンは、父ダビデが果たすことのできなかった神殿建設の計画を進めていくことが主の御心であると確信し、プロジェクトをスタートします。その神殿の大きさですが、この教会をふたまわりほど大きくしたくらいですから、イスラエルの神が住まうところにしてはそれほど大きいわけではありません。また、神殿の材料のことを言うならば、すべて石を積んで造りました。外側から見るなら、ごつごつして飾り気のない実に質素な印象です。ところが神殿の中は違います。石の上にまず杉材の板を張り、石が完全に見えなくする。その杉材の上に今度は金をかぶせます。神殿の奥には至聖所が設けられ、そこに十戒が記されている2枚の石の板が入っている契約の箱が置かれます。その至聖所には、契約の箱を見守るようにケルビムが二つ置かれていました。工事に着手してから七年後、神殿は完成します。それが6章に書かれていたことでした。

今日は続く7章を開いています。その1節にはこう書かれています。「ソロモンは自分の宮殿を建て、十三年かかって宮殿全部を完成した。」神殿を立て終わった後、ソロモンは次に自分が住む宮殿の建設に着手します。読んでおわかりのとおり、このあと宮殿の設計図の話が延々と続きます。こんなつまらない話で、読む意味があるのか。疑問に思ったでしょう。しかしここにも救いの恵みがあるはずですよ。いったいどこにあるのか。ともに考えてまいります。

1 ソロモンの宮殿

1) 大きさ

ソロモンは十三年かけて宮殿を建てていきます。おそらく第一期工事計画、第二期工事計画のようにして、何期かに分けて工事を進めたのでしょう。その宮殿はどのような建物であったのか。2節を読みます。「彼はレバノンの森の宮殿を建てた。その長さは百キュビト、幅は五十キュビト、高さは三十キュビトで、それは四列の杉材の柱の上になり、その柱の上には杉材の梁があった。」

宮殿の大きさについては数字だけ見てもわかりにくいので、神殿と比べてみるとよいでしょう。神殿は長さ六十キュビト、幅二十キュビト、高さ三十キュビトでした。高さは変わりませんが、神殿は長さも幅も大きい。容積で計算したら4倍大きい。また神殿の内側は聖所と至聖所の二つの部屋しかない非常に単純な造りでしたが、宮殿にはたくさんの部屋があるし扉もあります。

宮殿は自分や家族が生活する場所でもあったし、日本で言えば総理大臣官邸のように政治を行う場所でもあったので、これだけの大きさの建物が必要だったのでしょう。

2) 材料

次に宮殿の材料はどうだったのか。10、11節にあります。「礎は高価な石、大きな石で、十キュビトも八キュビトもあった。その上には寸法どおりの切り石、高価な石と杉材が使われていた。」

5章17節を見ると、神殿の礎にも大きな

石、高価な石が使われていることがあり、別の所には、神殿全体は石切場で切り出された石を使ったことも書かれていますから、神殿も宮殿も同じ材料を使っています。また 2 節に「レバノンの森の宮殿を建てた」とありますが、森林公園を作ったと言うことではなく、レバノンから切り出されてきた杉材をふんだんに使ったといういうことでしょう。神殿も杉材の板で内部がおおわれていましたからこれも同じです。

しかし材料という面で神殿と宮殿とは一つだけ大きな違いがありました。すぐにお気づきだと思いますが、神殿の中はすべて金が張られていましたがソロモンの宮殿にはそのような細工は施されていません。そこが違うところです。神殿は神を礼拝する場所であり、宮殿はソロモンが王としてイスラエルを支配するための執務室として使われます。

ここまで神殿と宮殿の違いをいくつか見ってきました。建物の使う目的が異なるのですから、実用的な面から言えば違いがあるのは当然でしょう。しかしもう少し霊的な視点から見直してみたらどうでしょうか。

3) 信仰をもって建てる

そのことに触れる前に、ソロモンは何を目的にして宮殿を建てたのかを押さえておきましょう。ただ生活や政治をおこなうためというのであれば、父が建てた建物がすでにありました。神殿を建ててからわざわざ宮殿を建てるということは、そこになんらかのつながりがあると考えべきでしょう。

そこで原点に立ち戻り、ソロモンがまずどんな信仰をもって主の宮を建てたのか。もう一度確認しておきます。ソロモンが神殿を建て始めたとき、主のことばがありました。6

章 12, 13 節です。「あなたが建てているこの神殿については、もし、あなたがわたしのおきてに歩み、わたしの定めを行い、わたしのすべての命令を守り、これによって歩むなら、わたしがあなたの父ダビデにあなたについて約束したことを成就しよう。わたしはイスラエルの子らのただ中に住み、わたしの民イスラエルを捨てることはしない。」

ソロモンは、この約束を覚えながら神殿を建てていきます。神殿が完成し、次に宮殿を建てるにあたって、信仰の土台はここにありました。主のみことばの中に「わたしのすべての命令を守り、これによって歩むなら」とあります。「すべての命令」とは何か。もちろんモーセの十戒もそうでしょう。でも、ソロモンは主に願っていたことがありました。

「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。」(3 章 9 節) この願いは御心にかない、主から知恵を与えられています。このことから深く自覚しました。自分は、神から委ねられたイスラエルの民をさばくために召されている。宮殿を建てるときはもちろん、自分の家を建てるときも、このことばを忘れるわけがありません。この宮殿は、主の民をさばくために用いられなければならない。そのような信仰をもって建てています。ただ頭で信じた、というのではない。信じたことは形になって現れてくる。ソロモンの信仰は、宮殿の構造の中に現されていきます。

2 宮殿の構造

1) 宮殿にだけあるもの：さばきの広間

いったいどこに現されているのか。一箇所だけ見ます。7 節です。「彼はまた、さばきをするための王座の広間、さばきの広間を造

り、床の隅々から天井まで杉材を張りつめた。」ソロモンは、自分がこれから何をするのか強く自覚しています。主の代わりとなつて民をさばく。それが自分の役割であるとわきまえている。そのための知恵を主からいただいているのです。どこでさばくのか。宮殿です。それで宮殿にさばきの広間を造ります。さばきの広間は神殿にはありません。ここが違うところです。

ソロモンはさばきの広間に座りどうするのでしょう。彼には、あくまでも「わたしの定めを行い、歩なら」という原則が課せられています。ソロモンがさばくのではなく、神の代理としてソロモンが立てられている。自分はいくまでも遣わされたものに過ぎない。王として勝手に権力を振り回すのではなく、むしろ謙遜でなければなりません。それがイスラエルの王の立場でした。

2) 神殿と宮殿の両方にあるもの：大庭

次に、神殿と宮殿の両方にあるものを見ていきます。12節に書かれています。「大庭の周囲には、三段の切り石と一段の杉角材が使われ、主の宮の内庭や、神殿の玄関広間と同じであった。」

宮殿には「大庭」と呼ばれる場所があつて、神殿では主の宮の内庭とか玄関広間に相当すると書かれています。それだけではない。もうひとつ、6章36節には神殿の内庭は「三段の切り石と一段の杉角材」で仕切られていると書かれている。これとなじものが宮殿にもあります。わざわざ三段の切り石と一段の杉の角材で囲むのですから、この「大庭」と呼ばれるところがよほど大切な場所であることを示しています。いったいどうして神殿と宮殿の両方にあるのか。

3 イエス・キリストを指し示す

1) やがて来られる方の姿

神殿と宮殿は、同じような時期に建てられたのだし、設計した職人もだいたい同じ人だったのだから、「似たところがあつても不思議はないでしょう。」そんな意見もあるかも知れません。確かにそういうことは言えます。私の母方の祖父は大工をしていて、私が生まれ育つた家を設計し建ててくれたそうです。その祖父の家に時々遊びに行ったのですが、行くたびにいつも不思議な気持ちになりました。というのは家の大きさは違うのですが、家の構造がほとんど似ていたのです。祖父は自分の書いた設計図がよほど気に入っていたのでしょうか。似たような構造の家を二軒建てた。神殿と宮殿の話もそういうことなのか。

ソロモンは、ダビデの世継ぎの子として、イスラエルをさばく権威を委ねられています。一方、この努めを罪ゆえに完全に全うできないことも自覚しています。神殿も宮殿も仮の姿に過ぎず、いずれ崩されていくことを知っています。でも、やがてダビデの世継ぎの子として来られるイエス・キリストが、完全にさばき、真の神殿を建ててくださることを信じています。ソロモンは、ただその救い主を指し示すために召されたものであることを自覚しています。その信仰をもってさばきの広間を造り、大庭を造っていきました。

2) 大庭に迎えられる

でもなぜ大庭なのか。「大庭」ということばは、詩篇に繰り返し出てきます。それを見るとわかります。今日はそのうちのひとつ、詩篇65篇、3、4節を取り上げます。「答が私

を圧倒しています。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してください。幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮のよいもので満ち足りるでしょう。」

主の大庭とは、罪に苦しんでいる人たちが招かれているところです。罪ある者は、さばきの広間に連れて行かれ、そこでさばかれておしまいです。ところが、イエス・キリストが身代わりとなってさばきの広間でさばかれていく。救い主を信じる者は、何の遠慮もせずに主の大庭に入りなさい。そこで喜びなさい。楽しみなさい。くつろぎなさい。あなたはこの世では得られないすばらしいもので満ち足りることになる。その場所が「大庭」だったのです。大庭は神殿にもソロモンの宮殿にもあった。三段の石段と一段の杉角材で特別に区切られている。そこに入る者はもう二度とさばかれることはない、言われているところ。

私たちはやがてこの大庭に迎えられ、主の御顔を仰ぎ見る日がやって来ます。その日を待ち望みながら歩いてまいります。